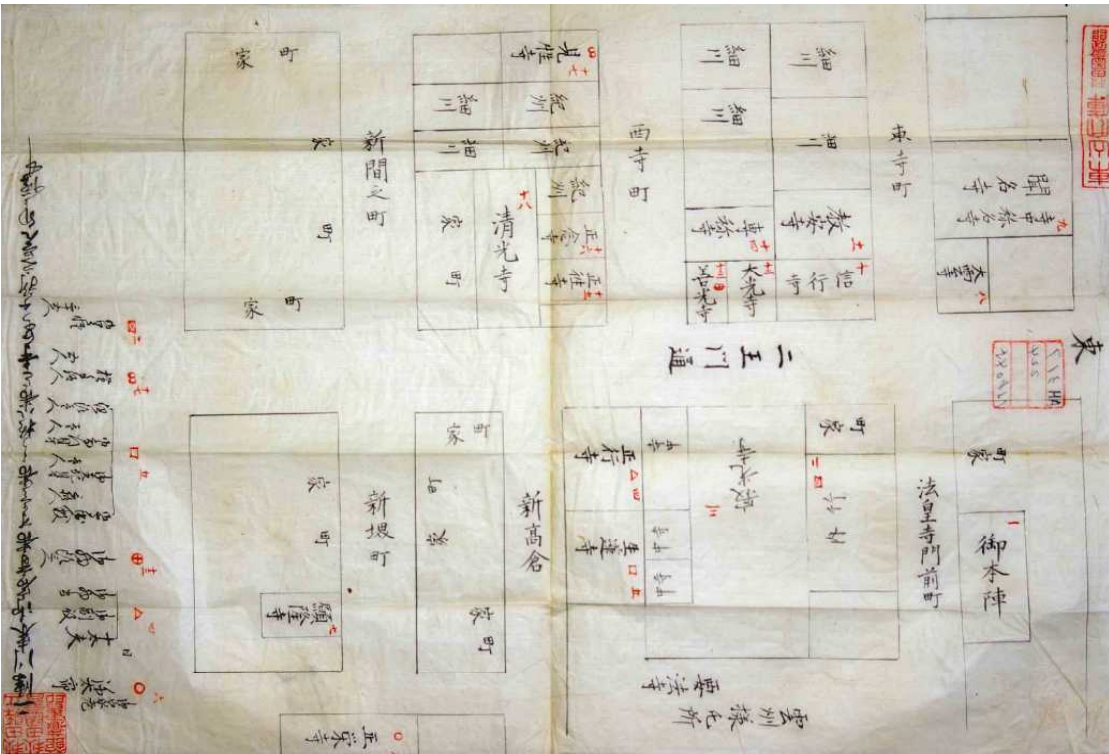


古文書倶楽部

幕末秋田藩士の足跡を京都に訪ねる



【発行】

秋田県公文書館

古文書班

2007.10

第18号

開催中の秋田県公文書館企画展「秋田県の成立と市町村の移りかわり」は、展示品を入れ替え十月二日にリニューアル・オープンしました。十月十九日（金）までの開催です。皆様、ぜひお越しください。

これは「京都御宿寺之図」(AH317 224)と表題のついた絵図です。史料の端に「二条川東御宿寺番付一番より十八番迄寺号ヶ所之覚 外二塔中」とあり、また家老塩谷弥太郎は正栄寺、家老戸村十太夫・副役・物書は正行寺、守衛人数三十人・支配目付・歩行目付・組頭は生蓮寺、横手給人五人は見性寺に宿泊したことが記されています。(足軽三十五人の宿泊地には「内竹」とあります。竹林でのテント生活ではないと思うのですが…)

ここからこの絵図は、秋田藩家老戸村十太夫が文久三年(一八六三)九月から翌元治元年十二月にかけて京都警衛のために上京した際の宿泊地を記したものに違いありません。

文久三年七月二十五日、伝奏の飛鳥井雅典は京都留守居長瀬隼之助に秋田藩主佐竹義堯の上京を命じる宸翰(天皇直筆の文書)を渡します。この宸翰は八月九日国元に伝わり、佐竹義堯は藩主一門で横手城の所預である戸村十太夫を代理として上京させることを考え、八月十四日に家老に就任させます。

家老となった戸村は九月二十五日に京都に到着し、翌元治元年十二月に御所警衛のために上京した塩谷弥太郎と交代するまで一年三ヶ月の間京都に滞在します。

同じ時期、京都では八月十八日の政変や禁門の変など日本史上有名な事件が起きており、特に戸村十太夫の日記には元治元年(一八六四)七月十九日の禁門の変当日の様子が詳しく記されています。

戸村十太夫を始めとする秋田藩士が宿泊した正行寺は京阪三条駅を少し北東に入ったところにあります。

幕末秋田藩士は京都で何を見たのか、足跡を訪ねてみては！(畑中康博)

陪臣への差別か？

〜狩野良知の上書〜

秋田藩大館の陪臣狩野良知（一八二八〜一九〇六）の著作は、嘉永六年（一八五三）北国旅行中に大館へ立ち寄った吉田松陰が持ち帰って松下村塾で刊行した『三策』が有名です。

しかし、狩野良知が文久二年（一八六二）に賀藤月篷（一七九二〜一八六七）の添え書きをもって明徳館文学の平元貞治（謹齋）（一八一〇〜一八七六）宛てに提出した上書（AH31284）はあまり知られていません。

文久二年といえは、二月に藩主佐竹義堯が藩政改革を指示するとともに、特に海岸防備に力を注ぐこと、更に五月には平田延胤を京都に派遣して、朝廷・西国の情勢を探索するよう命じた時期に当たります。そして八月に入ると佐竹義堯は十四代將軍徳川家茂の上洛に供奉することを願っています。

これについては多くの藩士から、將軍付きの上洛を思いとどまって欲しいとの願いが、家老や上司に対して上書の形で提出されました。

第18号 明徳館に寄宿していた狩野良知の上書も、その時の一つと考えられます。この上書が文久二年（一八六二）十一月であることは「天下之心を動し桜田・坂之下等之変をも激発するに至り」の表現があることや、賀藤月篷の添え書きの干支から明白です。

万延元年（一八六〇）三月の桜田門外の変で大老井伊直弼が暗殺されたり、文久二年一月に坂下門外の変で老中安藤信正が襲撃されるといった事件が続き、幕府の権威が重ねて失墜する中で、狩野良知はどのような主張を展開したのでしょうか。

彼は諸大名が東西に分かれ、勤王・勤幕等の名目が表面に出て、「君臣之名分大義之得失二関係致候次第」となって、国家の安危・利害が眼前に迫ってきていると述べています。

そこでどうすべきか。公武合体の可能性の薄れた現在、朝廷・幕府の二者択一しか方法はないと良知は主張します。これまで天下を統治する権限は將軍家に「被仮置候事」であったが、君臣の名目は古代より不変でありました。それゆえ、当藩も「是非勤王之拳を相唱え」るべきです。そして、その立場をあいまいにすることなく、領内の士民に疑惑を与えないように決断してもらいたいと結んでいます。ここまでは他の藩士の上書と異なることはないのです。しかし、話はこれにとどまらず学館の方針にまで及びます。すなわち「第一学館之儀八倫理を正し道義を明にする御場所二候得ハ」君臣の大義の存亡にかかわることと事理と意見を明白にし、時務を建白し、藩の進む道に失策なきようにするのが学館の役目であることと提案するのです。

この上書は最初家老の塩谷弥太郎に提出しようとしたが、「陪臣ノ上書工思慮有之、見セ不申」ということで、手順を踏みその向きへ差し出すようにとの指示でした。これを知っ

た賀藤月篷は、狩野良知の上書の内容は「此度御上洛ノ事二付、当今ノ時世柄御大切ト奉存、赤心ヲ吐露シテ陳述セル言々誠忠」と感心し、「一人ナリトモ実学有用ヲ心トスルモノハ、国器トモ称スベキ徒ナレバ、是ヲ奨進シテ」尊重すべきであると論じています。そして、狩野良知を陪臣であるがゆえに軽く見て、その発言を抑える態度は、学館の建学の精神にも反するとして平元貞治を厳しく叱責しています。

もとより平元貞治も学館文学の立場からの言い分もあつたと思われれます。彼自身の藩主への上申の言葉の中にも、狩野良知の主張の一部は入っています。ただ、藩主を擁護する官僚の人として、平元は藩論の沸騰を抑えたかったことも確かでしょう。もし、狩野良知が直臣であつたならば、どのような対応をしたであろうか、考えさせられる一齣です。（加藤民夫）

公文書館からの

大事なお知らせです

皆様に御好評頂いております当館の歴史講座ですが、十一月十六日（金）に開講予定の第五回歴史講座「奥羽列藩同盟から離脱した秋田藩」は、講師の御都合により中止させていただきます。

よろしく御了承ください。